

入試年度	2026	入試方式	一般（秋季）	課程	博士前期
研究科	発達教育学	専攻	心理学	領域（分野）	臨床心理学
出題のねらい・評価ポイント					
【1】 （1）【解答例】分散分析で3水準以上の要因に有意な主効果が認められた場合、どの水準間に差があるかを調べるために水準間の対比較など複数の比較を行う。 このように複数の検定を行う際には、第1種の過誤が増加するため、Bonferroni法やTukey法などの多重比較による補正を行う必要がある。 （2）【解答例】 臨床実践における仮説検証的アプローチ（hypothesis-testing approach）とは、クライアントの問題を科学的に理解・介入するための臨床推論の方法である。まず、アセスメントから得られた情報をもとに、クライアントの困難の背景や維持要因について仮説を立てる。次に、その仮説に基づいて介入方法を計画・実施し、介入の結果を面接・検査・観察などを通して検証する。得られた結果を踏まえ、仮説が支持されない場合は修正し再検討を行う。 このように、主観的な印象や経験則に頼るのではなく、データと理論に基づく循環的な検証プロセスを重視する点に特徴がある。 （3）【採点基準】 ・ヒトの道徳的判断は段階的に発達する。（10%） ・3つのレベル、6段階がある。（60%） ・各レベル、各段階の詳細。（30%） （4）【解答例】 変容説（交換仮説）と共存説の2つの説がある。変容説（交換仮説）では、事後情報効果は事後情報により元の記憶が変容する、あるいは置き換えられることにより生起すると考える。したがって、事後情報効果が生じた場合には、元の記憶は残っていないと考える。一方共存説では、事後情報により別の記憶が作られるが元の記憶も存在し続け、何らかの事情で事後情報が想起されることで事後情報効果が生起すると考える。つまり、元の記憶と事後情報が記憶内に共存していると考ええる。 （5）【解答例】 注意の神経基盤は、前頭葉、頭頂葉、前帯状回、視床、上丘などからなる広範なネットワークによって支えられている。前頭前野はトップダウン的制御や反応抑制に関与し、前頭眼野は視線や空間的注意の移動に関わる。頭頂葉は空間的注意の配分に重要であり、右頭頂葉損傷では左半側空間無視が生じることが知られている。前帯状回は、ストループ課題などでみられる反応葛藤の検出や注意の調整に関係する。視床枕は感覚情報の選択的中継に関与し、上丘は外界刺激への定位反応や眼球運動と関連する。 （6）【解答例】 PM理論は、三隅二不二によって提唱されたリーダーシップ理論である。この理論では、リーダーの行動について、P（performance）機能とM（maintenance）機能という2つの機能により整理している。P機能は、目標達成のための計画を立てる、メンバーに指示を与えるといった課題指向的な機能を指す。M機能は、集団自体のまとまりを維持・強化する、メンバーの立場を理解する、集団内に親和的な雰囲気を生み出すといった人間関係指向的な機能を指す。PM理論では、これら2つの機能の高低を組み合わせることで、両機能を備えたPM型、P機能のみ備えたPm型、M機能のみ備えたpM型、いずれも不十分なpm型の4つに類型化されている。実際の研究結果から、生産性とメンバーの満足度のいずれについてもPM型が最も良いことが示されている。 【2】【解答例】 ソーシャルスキルトレーニング（Social Skills Training: SST）は、対人場面での適切な社会的行動を学習し、社会的適応を促進する心理的介入である。基本的な手続きは、①目標行動の明確化、②モデリング、③ロールプレイ、④フィードバック、⑤強化、⑥般化の段階から構成される。 SSTの理論的基盤には、オペラント条件づけ理論および社会的学習理論（観察学習）がある。ここで重要となるのが、正の強化フィードバックである。ロールプレイ後に援助者または他参加者が適切な行動を具体的に称賛・強化することで、オペラント条件づけに基づく行動維持が可能となる。 また、学習したスキルを実生活で用いることができるようになるためには、般化を意識した構成が欠かせない。SSTでは、セッション内だけでなく、日常場面でのホームワーク課題を設定し、ホームワーク実践後に体験を共有・振り返る過程を組み込む。これにより、セッション場面で得た新しい行動が現実の社会的文脈でも発揮され、定着が促進される。 さらに、SSTは単なる行動への介入技法ではなく、認知行動療法の一技法として位置づけられる。その理由は、行動の背景に存在する「他者は自分を否定的に見る」「失敗したら嫌われる」といった自動思考や信念に働きかける点にある。行動練習の過程で、「意外と相手は受け入れてくれた」「自分にもできた」というような経験的認知再構成を重ねることで、思考の歪みが修正され、自己効力感が高まり、より現実的で柔軟な認知が形成される。このように、SSTは行動面への直接的介入にとどまらず、認知面への間接的介入をも含む実証的アプローチであるといえる。 【3】【採点基準】 ・支援者支援である。心理職がこどもに直接支援するのではない。（30%） ・先にアセスメントをする（聴取、行動観察等）。（30%） ・アセスメントに基づく支援の提案（具体性、保育や日常生活での実行できるもの）。（30%） ・その他（心理の専門用語ではないことへの配慮等）。（10%）					